1969.4.10　明治大学新聞

われら青春の日々

京大で徹夜の闘争
生涯をマルキストで

「学生運動」
横谷　優一

二月二十七日夜十時。彼―横谷優一は五人の仲間と共に東京駅のホームに立っていた。〝京大の入試を阻止して帝国主義大学を解体するのだ。東大・日大闘争の行きつまりも打開できる。必ず入試を阻止せねば――彼の胸の中には固い決意が秘められていた。十時二〇分。急行「銀河」は一路京都へ。窓の外をネオンが流れる。「当分東京ともお別れだな」と思うとかすかな感傷が彼の胸をしめつけた。空は満天の星である。彼は夜景を見ながら何とはなしに過去を回想していた。

彼は昭和二十三年、北海道帯広市に生れた。三十八年、帯広三条高校に入学。同校二年の時共産党宣言を読んだ。四十一年入試に失敗して浪人生活に入り、東京で新聞配達をする傍ら予備校に通った。マルクス主義の古典を読み始めたのはそのころである。実際に働らいてみて、彼は資本主義の矛盾を知った。働けば働くほどそれは身にしみて感じられた。〝大学へ行ったら学生運動に身を献げよう。そして生涯マルキストとして生きよう――黙々と新聞配達をしながら、いつからか彼はそう思うようになっていた。四十二年四月本学に入学。すぐに社学同統一派に入る。エンプラ入港阻止闘争、神田カルチェ・ラタン闘争…と数々の闘争に彼の姿が見られた。また、翌年の和泉祭には実行委員長として敏腕をふるった――。

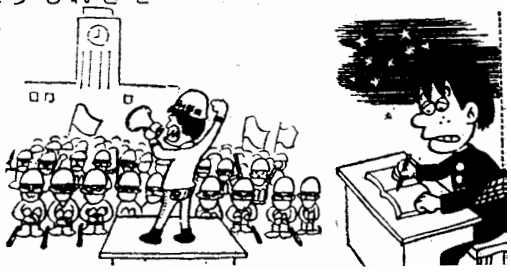
いろいろな思い出が脳裏をかすめていくうちに、いつしか眠りについた。

気がつくと、もう京都であった。太陽が目にしみる。到達するとすぐに同志社大学へ行き先発隊と合流。連日の闘争でさすがにみんな疲れが見えている。パンと牛乳の簡単な朝食をとった。牛乳の冷たさが咽喉にここちよい。彼は東京から行った部隊の指揮をとることになった。正午、本部前集会。赤レンガ造りの同志社は中世ヨーロッパの城を思わせる。「……大学の帝国主義的再編にわれわれは徹底的に闘わねばならない。われわれは現在の大学と市民を結合させているところの入学試験を実力で阻止することを通して、安保粉砕から日本帝国主義打倒を展望する運動の中で大学をわれわれの砦として位置ずけ、さらには学生運動のワクを脱してこの闘争を全人民的な闘争としで闘わねばならないと考えます……」。体は小さいがハリのある声でアジる。前を埋めたおよそ二〇〇名の学友から、「異議なし」の声が上る。

夜、京大教養部のバリケードを補強する。みんな黙々として動く、疲れた――。しかし妥協は許されない。頑張れ。何としても入試を阻止するのだ。彼は自分に何度も言い聞かせた。九時、おにぎりと豚汁の夕食をとる。「そうだきょうは昼食を食べていなかったんだっけ――」昼食も忘れて動き回っていた自分がおかしくなって笑いがこみ上げてきた。その夜はとうとう徹夜であった。

三月一日午後五時すぎ。学生の主力が教養部から本部へと移っていたすきをついて機動隊が教養部に乱入。その数はおよそ二〇〇〇。「とうとう来たか」と彼は思った。彼らに個人的な恨みはない。しかし国家権力の暴力装置としての彼らとは闘わねばならない。二時間後、道一つ隔てた本部構内にも装甲車を先頭にして機動隊が入ってきた。激しい投石とゲバ棒でこれに対抗する。見守る一般学生も「機動隊帰れ、帰れ」のシュプレヒコールで応酬。警棒が唸り、怒声がとぶ。逃げながら振り返ると乱打される学生の姿がいやおうなしに目にとびこんでくる。ジュラルミンの盾が投光車の光を不気味に反射しながら追ってくる。みさかいなしに警棒が振りおろされた。受験生だという高校生も頭から血を流している。やがて八時すぎ、機動隊は退却した。張りつめていた緊張がほぐれ、ひとりでに「フー」と長いため息が出る。紅潮した頬に夜風が冷たかった。闘争の合い間のつかの間の虚脱。ふっとモダン・ジャズが聞きたくなる。おもいっきりレコードのボリュームを上げて陶酔の世界、無心の世界に入りたい。しかしそんな幻想はすぐかき消される。東大路通りにバリケードを構築せねばならない。一時なりとも権力の空白状態を造り出して革命へのあしがかりとしなければ―。十一時、東一条から百万遍にかけて約三〇〇㍍の〝カルチェ・ラタン〟が完成した。車は全く通らない。真の人民の街だ。伸び伸びとした解放感が体のすみずみにまで拡がる。解放―。何とすばらしいことではないか。全人民の解放までわれわれは闘わねばならないのだ。新な決意に彼の血はたぎっていた。

闘争は三日まで続いた。三日午後六時。同志社大学で東京へ帰る者が集まって総括集会が開かれた。「…国家権力と京大当局とのゆ着を基本的には暴露できた。これは単に京大のみの問題ではなく、全大学の問題なのだ。われわれはますます激しくなっている政府国家権力の帝国主義的大学再編を永続的に粉砕していかねばならない…」。彼も要請されて演説をした。その後、彼はいっしょに東京から来た仲間と共に駅へ向った。しかし、仲間のうちひとりが逮捕され、今は四人である。途中でちょっとビールを飲んだ。ビールのほろ苦さが咽喉にしみわたり実にうまい。今までの闘争の疲れが一度に吹きとんでいくようだ。しかし話はあまりはずまない。逮捕されたAのことが気にかかる。午後十一時二七分、東京行きの汽車に乗る。席につくと今までの疲れがどっときた。すぐに彼は泥のように眠り込んだ。

（K）

×　×　×